

# 緑の福祉国家

—コミュニティ経済の生成と展開—

千葉大学法経学部教授 広井 良典

「あすの視点」は、2013年12月2日に開催されました、2013研究フォーラム「持続可能な未来社会を拓くコミュニティ経済」の基調講演の講演抄録を掲載いたします。

## はじめに

日本は、2005年以降人口減少社会に入っています。確かに大変だという面もあるかとは思いますが、むしろ逆にこれを本当に豊かな社会を実現していくための一つのチャンスと考えられるのではないかと思います。明治維新以降の富国強兵、それから戦後の経済成長一辺倒で、無理に無理を重ねてきたその矛盾が、今いろんな形で表れている状況の中で、これまでの発想から方向転換して、生活の豊かさや人々の幸福といったものを実現していく転換期にきているのではないかと思うわけです。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、最近幸福に関する議論が活発になっています。幸福度において何が重要かという点、コミュニティのあり方とか、平等度（格差とか分配）です。それから自然・環境との関わりとか、精神的・宗教的なよりどころ等といった、非経済的な要因が非常に重要となっています。

## 緑の福祉国家

これまで国の福祉政策のあり方においては、大きな政府（高福祉高負担）と小さな政府（低福祉低負担）というふうな対立があったわけですが、いずれも成長・拡大志向という点では共通していました。それが1970年代からいわゆる「成長の限界」というのも出されるようになって、単純な大きな政府でも単純な小さな政府でもない、成長と対局にある環境とか定常ということに軸足を置いた社会の姿が求められるようになってきます。GDP（国内総生産／一定期間内に国内で産み出された付加価値の総額）の増大を前提としなくても十分な豊かさが実現していくような社会、個人の生活保障や分配の公正が実現されつつ、環境とも調和するような福祉国家のあり方です。それを持続可能な福祉社会といういい方もできますが、緑の福祉国家や脱成長の福祉国家と言い換えることもできます。

私が見る限り、この緑の福祉国家に最も近い姿になるようとしているのが、ドイツとかデンマーク、オランダといった国々だと思います。ドイツはご存じのように、メルケル首相が福島震災を受けて脱原発という

方向をはっきり打ち出しました。2050年までに電力の80%を再生可能エネルギーで賄うという目標を掲げていますが、それだけでなくローカルなレベルに根ざした経済循環から出発していくという志向がもともと強い国です。それから手厚い高福祉高負担型の社会を実現しているデンマークは、1985年に脱原発を決定していて再生可能エネルギーでも有名です。そしてオランダはまたちょっと違いますけれども、ワークシェアによって夫婦で「1.5モデル」という共働きパターンを推奨し労働時間を全体として減らし、かつ男女の役割分担をできるだけフレキシブルにしながら、環境と福祉が調和した社会を実現しようとしています。

## 資本主義の進化と社会保障

日本はなぜ比較的最近まで低い社会保障でやってこられたのでしょうか。それは、会社や家族に依存するような部分が大きかったインフォーマルな社会保障と、公共事業が社会保障を肩代わりするような機能を持っていたという面があったと思います。しかし、こうしたセーフティネットが今はほとんど極めて不安定で流動的なものになって、残念ながらジニ係数の大きい、つまり格差が大きい社会ということになります。また、メキシコやアメリカ、トルコと並んで労働年齢人口（15～64歳）に対する社会保障が小さくて、相対的貧困率（世帯所得をもとに国民一人ひとりの所得を計算して順番に並べ、真ん中の人の所得の半分に満たない人の割合）が高いという状況にあります。特に失業率も10代後半から30代前半の年代層が一番高いという具合になっていて、生活上のリスクが人生の前半に広く及ぶようになっている状況があります。

ただ、若者の失業率の高さというのは決して日本に限ったことではなく、先進国共通のものであるわけですが、なぜそういうことが起こるのでしょうか。これは大きくいうと、今の先進諸国といえますか資本主義がある種の生産過剰に陥って物があふれるような時代になっているからです。労働生産性が上がれば上がるほど、皮肉なことに少ない労働でたくさんの物が作られ、結果として失業率が高まってしまっている状況に陥っているわけです。

ではどういふふうにしたらいいのでしょうか。一つは労働時間を含めた過剰の抑制です。それから人生前半の社会保障の充実、医療に限らない心理的・社会的なサポートあるいは精神的なケアを重視した社会保障、高齢者や低所得者等に対する住宅、土地、資産などの確保に関する社会保障を重視した再分配です。それからセーフティーネットは、これまでは市場経済から落伍した人に対して事後的な救済をするという対応できたのが、これからはそうではなくて、できるだけ事前のといいますか、コミュニティにまでさかのぼった対応が必要だということです。

### コミュニティ経済

コミュニティ経済を巡る構造をピラミッドに想定した場合、一番上の層が市場経済で真ん中にコミュニティがあって、一番下が自然とか環境となります。大きく言うと市場経済の領域が、コミュニティや自然から切り離されて、どんどん離陸して拡大・成長していったのが資本主義の流れであったと思います。コミュニティ経済というのは、市場経済をもう一度このコミュニティ、ひいてはその根底にある自然とか環境につないでいく、コミュニティや自然というものを包含するような経済の在り方がコミュニティ経済の基本的な趣旨になるかと思っています。

現在コミュニティ経済というのは、まだ私自身も含めて生成しつつある概念で、詰めきれてない部分があるのですが、重要な要素として4つほどあるんじゃないかと思っています。1番目が、経済の地域内循環で、ローカル化ということと重なってきます。ヒト・モノ・カネが地域で循環するような経済です。これはおそらくグローバル化に対しても強い経済になっていくのではないかと。途上国と価格競争をやっていっても、結果的にそれは賃金カットを繰り返すことになって、かえって経済にとっても悪循環に陥ってしまう。むしろ、ローカルでできるだけヒト・モノ・カネが循環するような経済を作っていくことが、グローバル化に対して弾力性や柔軟な強さを持っていると思います。

それから2番目としては、生産のコミュニティと生活のコミュニティの再融合です。農漁村とか商店街のようなイメージを考えれば分かりますように、以前は生産のコミュニティと生活のコミュニティというのはかなり重なっていました。それが、どんどん分離していったのが高度成長期の時代であったわけです。それをもう一度つなげていくことが、コミュニティもよりしっかりとした基盤になるのではないかという点です。例えば長野県飯田市では、地域内経済循環に関して経済自立度というような指標を出して、できるだけ地域で循環するような経済を作っていくというような試み

もあります。それからもう一つ輸出依存度の国際比較を見ると、日本はGDPに占める輸出の比重が10%強です。30%から50%ぐらいの国も多い中で、むしろ日本は内需によって支えられている部分が多いといえます。その割には高度成長期以降、輸出立国ということがやたら協調されすぎてきている面があるのではないかと思います。もともと日本は内需で循環しているという面が比較的大きい国なので、これを積極的に生かしていくというポテンシャルをもっているのではないかと思います。

3番目は、経済がもともと持っていたコミュニティ、あるいは相互扶助的な性格です。日本で身近な例としては、近江商人の家訓で、三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）というような言い方があったりします。それから日本資本主義の父といわれる渋沢栄一も著書『論語と算盤』の中で、経済と倫理の統合というようなことを論じています。そういう倫理性とか、あるいは相互扶助的な要素を入れてこない、経済というものの自体が長続きしないと思います。

それから4番目の要素としまして、生産性という概念を考え直す必要があるのではないかということです。これまでの生産性の概念というのは、労働生産性が中心で、できるだけ少ない人手でたくさん生産を上げることでした。それはかつての「三丁目の夕日」のような、労働力が不足していて資源がいくらでもあった時代には、それで良かったわけですが、現在はむしろ構造的な失業が生じて逆に資源が足りない。むしろ人を積極的に使って資源をできるだけ使わない、あるいは環境負荷をかけない生産性、あるいは環境効率性というものが重要になってくるわけです。そうなってくると福祉や教育といった労働集約的な分野こそが逆に生産性が高いというように、概念を根本的に考え直していく必要があるわけです。こうした話とコミュニティ経済というのがつながってくると思います。

それで、コミュニティ経済というものが、具体的にどのような形があるのかということですが、一つは福祉（コミュニティ）商店街があげられます。荒川区民総幸福度（グロス・アラカワ・ハッピーネス）を掲げている東京都荒川区のジョイフル三ノ輪という商店街は、単に消費の場というだけではなくて、コミュニティの場、あるいはそこで高齢者の方も含めてちょっとした会話をしたり、コミュニケーションをしたり、ちょっと休んだりする空間でもあります。相互扶助とかコミュニティ的な要素と経済の場が融合した姿ですが、さらにここにいろいろなカフェとか図書館といった要素を結びつけることで、より発展していく可能性があるのではないかと思います。最近サードプレイスという考え方もあります。自宅でも職場でもない、第3のゆっ

くりくつろげるような場所が大事だという意味です。

また、都市農業に福祉・医療をつないだ、自然との関わりを通じたケアをしたり、自然エネルギー拠点とコミュニティづくりを合わせるといったような面白い試みなどもあります。都市でもいろいろな形が考えていけるのではないかと思います。

それから、UR（都市再生機構）の団地の再生として、世代間交流などを試みたコミュニティスペースを周囲の地域や団地内に設けたり、高齢者関連の中間的雇用の場とか、いろいろなコミュニティ経済の形が考えられると思います。

さらに私が一昨年頃から進めているのが「鎮守の森・自然エネルギーコミュニティ構想」です。ジブリ映画的世界ともつながりますが、日本には約8万の鎮守の森ないし神社があり、これは古くから自然や信仰が一体となったコミュニティの拠点として存在していました。しかもそれは市場や祭りなど、コミュニティの経済機能とも不可分でした。そうした鎮守の森を、エネルギー自治の観点に立ったローカルな自然エネルギーの拠点整備と結びつけていくというのがこの構想で、現在、小水力発電などを中心に進めています。「鎮守の森コミュニティ研究所」というのも始めましたのでご関心ある方はホームページをご覧ください幸いです。

#### グローバル化の先のローカル化

私がここ5、6年ぐらいで非常に感じてきましたのが、若い世代のローカル志向です。ゼミの学生を見ましても、例えば静岡のある街の出身の学生が、自分の生まれ育った街を世界一住みやすい街にしたいとか、1年ぐらい東京の大企業で働いていた岐阜県出身の学生が地元の活性化に関わっていきたいということで、地元に戻り地場産業に再就職しています。最近の若者は内向きになったとか、外に出て行く覇気がないというような批判がありますが、それは私から見ると全くの的外れです。グローバル人材も大事ですけども、むしろローカル人材といった方向を支援するような試みが今非常に大事になっているかと思います。

ここで、明治以降のさまざまな社会資本が、どのように整備されてきたかを概観してみたいと思います。第1に鉄道が全国に普及しました。2番目に道路とか上水道です。特に道路は自動車産業と一体となって、これは高度成長期を象徴するようなものとして広がりました。そして第3の高度成長期の後半期は下水道、都市公園、空港といったものが整備されてきました。これらはもう飽和していますが、いずれも国レベルに及ぶような性格のものであったといえます。それらに対して、これから重要になってくる領域というのが福

祉・環境・文化・町づくりです。いずれもローカルな性格のもので、国全体レベルでどういうふうと考えていくかというよりは、それぞれの地域でどういったあり方が望ましいかということを考えていくべきものです。そうした経済構造の変化という点からも、ローカル化がこれから進んでいく時代になっていくのではないかと思います。

#### 定常型社会

これまでの成長の時代というのは、いわば時間軸が優位な時代で、こちらの地域は進んでいるとかこちらの地域は遅れているといったように、時間軸で物事を見る時代でした。それに対して定常化、成熟化していくこれからの時代は、それぞれの地域が横に並ぶといえますか、それぞれの地域の固有の価値とか多様性といったものに人々の関心が向かっていく時代になってくると思います。いいかえると「地域への着陸」とでもいえるような、そういった中でコミュニティ経済というものが非常に大きな意味を持つようになっていくのではないかと思います。

これを人類約20万年の歴史の中でみますと、「狩猟・採集社会」および「農耕社会」にもそれぞれ定常期がありました。現在は、その次の「産業化社会」における3回目の定常期といえます。拡大成長から定常期への移行期になっているといえます。物質的生産の量的拡大というような時代から、文化的あるいは質的な発展へ移行していく時代です。そうした中で市場経済が飽和して、今日お話しさせていただきましたコミュニティ経済といったものが生成し展開していくなかで、緑の福祉国家とでも言えるような社会のビジョンがあるわけですね。その基盤にはローカルレベルでの地域内経済循環があって、そこから出発して物事を考え、またいろいろな試み活動を行っていく。そういうことが重要ではないかと思います。（ひろいよしのり）

